

## Member's Forum

会員投稿の頁

U-35委員会企画  
talk baton 03 活動報告

## talk baton とは…

若手プラットフォームづくりの活動の一環として、建築を取り巻く他分野のゲストがトークのバトンを繋げていくコミュニケーショントークイベントです。

建築をフィールドとする私たちと毎回のゲストとの対話を通じて、建築が本来持っている多様性やバイタリティを見つめ直し、これからの建築に求められる領域を探っていきます。

## U-35委員会Facebookページ

活動内容やメンバーの雑感などざっくばらんに情報をアップしています。ぜひ一度お立ち寄りください。

<https://www.facebook.com/U35.aaj>



庭の中でのトークセッション



スギゴケの中庭

中庭を囲む展示空間

## talk baton 03

## 「建築と庭」

ゲスト

六堂舎 中井造園

代表 中井岳夫 氏

大学卒業後に自ら造園屋を開業。関西を拠点に庭の設計施工管理に携わるなか、アート製作など幅広く活動中。



大阪から電車で1時間。滋賀県比良山の麓に静かに佇むgallery サラが今回の会場。沢が流れる前庭、スギゴケの中庭、茶会の場となる後庭。今回のゲストである中井氏の想いが込められた庭を肌で感じながら、早春の雨上がりの青空の下、普段のU-35の活動とは違う時間帯と場所からtalk baton03『建築と庭』はスタートした。

## ■イメージを育てる

galleryのエントランスに入るとすぐ目に入ってくる鮮やかな緑の山。スギゴケで覆われた二山のボリュームは回廊式展示空間の中庭にあり、一つのアート作品のような佇まいである。当初オーナーから「ゆっくりリラックスができ、もの思いに耽ることができる庭」というお題を受けた中井氏は、韓国のお墓から発想を得て、スギゴケのふたコブの山に行き着く。

中井「強くない、さらっと柔らかいものをイメージした。湿気が多い空気や建築のスケール感を意識し、草や樹木ではなく、繊細なコケひとつを選択した。」

浮かんできたイメージをオーナーとの対話で共有し、育てることでギャラリーの中心的な場を実現している。彼の朴訥として真面目なその語り口からは、庭に対する強い意志を感じた。

## ■生きた素材と向き合う

植物という生きた素材を扱うことについて、日頃意識していることを彼に尋ねた。

中井「庭師の仕事はその大半が植物の手入れです。基本は不要なものを取り除くこと。害虫を駆除し、雑草を抜き、伸び過ぎた枝に鉄を入れる。つまり殺す仕事なんです。」

生物の生き死にを扱う彼なりの庭師の覚悟が伝わってきた。更に続ける。

中井「枝に鉄を入れる時は、その先の成長をイメージします。」

建築とは違い、完成形が見えづらい庭。庭師である彼の覚悟や時間的な感覚は、我々の日常的な視点を揺さぶるものであった。

## ■対話を重ねる

後半はgalleryを出て、庭を歩きながらのトークセッションとなった。沢のせせらぎが聞こえる中、ウメ、シダレエンジュ、ツツジ、様々な樹種に溢れた庭を前に庭師と参加者の対話が進む。植木屋の良し悪しの見分け方・ナラ枯れ被害の止め方・石の置き方。また、驚いた事に彼は図面をほとんど描かないと言う。

中井「庭の構成は頭の中でイメージします。画で表現するのではなく、現物を施主と見に行き、対話を重ね、共有することでイメージを伝えていきます。」

庭に植えられている多くの樹木がオーナーと共に植木畑に足を運んで選んできたものだと言う。対話を重ねること。我々のワークスタイルの中にもその共通点を見つけた気がした。

最後に恒例の質問。「これからどんな事をしていきたいですか。」と尋ねると、「素人さんを巻き込んでどんな事ができるかを思案している。」と答えてくれた。彼の対話の作業は今後もその相手を変え、対象範囲を広げながら、続いていきそうだ。

## talk baton 03 を終えて

今回は、U-35初の遠征企画となった。ゲストの中井氏と企画を検討する中で、会場は庭しかないと確信した。早春の晴れ間のもと、参加者が沢のせせらぎに耳を傾け、庭木に接しながらゲストと対話する姿はまさに庭を楽しむ日本の原風景に触れた気がした。

対談 日：2015.04.04

場 所：gallery サラ  
(滋賀県大津市)

モデレーター：西森 史裕 (大林組)